

そのあとで

「小人の汽車」の作者はる語

—「話の理解について」

を読んで—

中 島 研

六

小人の汽車

話の理解について考える時、子供達は何を望み、どんなものを喜ぶかということをもつと適確につかみたいと思う。

と、述べられておられ、わたくしは、何を望み、何を喜ぶかという事について作者の立場から小人の汽車を解剖してみるのも、何かの参考になるのではないかと思いました。



本誌五十二巻第十号には、東京学芸大学附属幼稚園の谷口先生が、話の理解についての興味ある報告(4)の中に、わたくしの作った「小人の汽車」を取りあげられて、次のようにかかれています。

六月と七月では一ヶ月の生長があるにしても、相当すじが複雑になり、登場人物も多い小人の汽車が、もぐらとお日様よりよくおぼえていた。年長組と年少組の平均点の差は小人の汽車の方が少なかつた。これら二つの事実から画面がそれの理解をたすけたといえると思う。特に小さい子供達の方が絵があつた方が理解しやすい。

たしかに、谷口先生のいわれるよう紙芝居である方が、理解をたすけることは事実であります。

あるいなかに、お爺さんとお婆さんと楽しく暮しております。お爺さんはお婆さんのお顔をみると、にこに笑います。お婆さんはお爺さんのお顔をみると、にこに笑います。ふたりは何時も、にこに笑っているのです。

お爺さんは、ことし六十にもなりましたが、からだは丈夫で働いているのです。そして、雨さえ降らなければ、朝は早く起きて、お婆さんにおにぎりを三つこしらえて貰つて、くわをかついで、はたけへ出かけていきます。

お爺さんは、はたけに着くと、すぐに、仕事にかかります。そして、お屋になると、お婆さんのこしらえてくれたおにぎりを、二つ食べて、残りの一つは、お婆さんにお土産に持つてかえるのでお婆さんは、毎日、はたけからお土産を持ってかえ

るお爺さんを、楽しくまつていました。

夏の或る朝のことです。早くに起きたお爺さんお婆さんは、
にこにこにこ。

「さあ、お爺さん、おにぎりができましたよ」

「そうか、そうか、ありがとう。それではこれから、はだけへ
行つてくるよ。どうなすも大きくなつたよ。お婆さんの頭ぐら
いになつたよ」

「それはよかったです。お爺さん、でも、このころは大変暑
くなつたから、からだに気をつけてくださいね。それに、夕立
が時々ありますから、雷のならないうちにおかえりなさいね」

「ああ、かえつてくるとも」
「お爺さん、わたしはね、あの雷の音が聞えると、お爺さんの
かえつてくるまでは、心配で、心配で」

お爺さんは、ふと、いつものお婆さんのにこにこ顔の目の中
に、涙をちらつとみたのです。

「大丈夫、大丈夫向うのお山に入道雲が、にゅうと出てきた
ら、いそいでかえつてくるからね」

入道雲が、にゅうと出たら——といった言葉が面白かったた
とみえて、お婆さんはにこにこと笑いました。
「じゃあ、このおにぎりを、腰にさげて、それ、くわをかつい
で、さあ、いつてくるよ」

と、いいながら出かけました。

はたけに着いたお爺さんは、かついていたくわをおろして、

それから、おにぎりを包んだ布呂敷を木の枝に結びつけると、

幼く仕度にかかりました。

「お婆さんの頭ぐらいに大きいと思っていたとうなすも、今日は、まるで、フットボールみたいに大きくなつた。お婆さんもさぞ、喜んでくれるだろう。さあ、朝のうちに一生懸命に幼くことにしよう」

くわをにぎつてお爺さんは、

えんこらさあ、
どっこいさ。

やつとい、どっこい、
どっこいさ。

汗がひたいから、ぼたぼた、ぼたり。それでも、お爺さんは

えんこらさあ、
やつとい、どっこい、
どっこいさ。

と、かけ声かけて幼いておりました。

そのうちにお屋になつたので、木の枝から布呂敷包みをほど
き涼しい木のかげに腰をおろし、おにぎりを食べ始めました。
「ああ、おいしいおいしい」

お爺さんが二つのおにぎりを食べ終つた時、楽しい音楽が聞
えてきました。お爺さんは夢の世界にひきこまれていくのでし
よう。こっくり、こっくり、いねむりを始めました。

楽しい音楽は、お爺さんのいるところから少し離れた草むら、
そこには、小さな穴があつて、その、穴の奥から聞えてくるの

です。たぶん、小人達が踊りをおどっているのでしょうか。

「さあ、みんな、おどりは止めて外へ出てみよ。」

「そうだね、それがよい、それがよい。」

「ぼくはいやだ。暑いのなもの。」

「弱虫だなあ、こんなところにばかりいるとからだが弱くなるよ。」

「さぶちゃんは、だから夏やせするんだよ。外へ出てごらん。ね、かんかん、お日様が照っていても大丈夫。緑の葉が、

ぼく達を守ってくれるのだよ。」

「だつて、おなかがすいたのだもの。」

「さぶちゃんは、すぐ、おなかがすいたっていんだね。ぼくがおぶつていてあげるよ。ね、いこうよ。じろちゃんも、しろちゃんも、ころちゃんも、みんないくだろ？」

「いきたいな。」

「ぼくはハイキングがしたいな。」

「ぼくはハイキングがしたいな。」

「おなかがすいたのだとこらん。」

「さぶちゃんは、こんなどこにばかりいるとからだが弱くなるよ。」

「ぼくはハイキングがしたいな。」

「ぼくは水泳がいいな。」

「ハイキングもハイキングも水泳も、こんどの日曜日に、ぼつぼつ

の汽車にのつていくとして、今日は裏山へ遊びにいこう。それに、さぶちゃんじゃないけれど、そろそろ、おなかがすき始めたから。食物を探しながら。」

「さつさと、いこう。」

「さあ、いこう。」

緑色、赤い色、うす紫色、クリーム色の、色々とりどりの帽子

をかぶった小人達が、ぞろぞろ、穴の中から出でました。

お爺さんは、まだ、まだ気持よさそうにねていました。ふと小人のいちろうさんがお爺さんのひざの上をみた時に、布呂敷の上に一つ、おにぎりのあるのが目に付いたのです。

「じろちゃん、さぶちゃん、しろちゃん、ころちゃん、お爺さんのひざの上をみてごらん。」

「あれ、なに。」

「おいしいおにぎりだよ。」

「食べたいなあ、食べたいなあ。」

「でも、あれはお爺さんのものだから。」

「食べたいなあ、食べたいなあ。」

「ほつとすると食べ残りかも知れないぞ。」

「食べたいなあ、食べたいなあ。」

「まつておいで。それでは黙つて食べてしまおうか。」

いちろうさんは、お爺さんのおにぎりを持つてくると、弟の小人達にわけてやりました。

「おいしいなあ。」

「おいしいなあ。」

「兄さん、おいしいのを食べたので急に元気が出できたよ。」

「ぼく、おどりたくなった。みんなでおどりましょよ。」

「食べてすぐおどるのは、からだのために悪いから、ここで少し休んでいこう。」

小人達も草むらのかけに腰をおろすと、いつのまにか、ぐっすりねむってしまいました。

お爺さんがふと氣がついて目をさました時には、まだ三時だ
というのに、向うの山に入道雲が、もぐり、もぐりと出は
じめました。

「どうしたというのだろう。今日に限ってねでしまうなんて。
あれあれ、入道雲が出てきた。お婆さんは心配しているだろ
う。早くかえるとしよう。あー！ お土産がなくなってしまった
た。たしかに一つ残しておいたのに……もしかすると、からす
たの勘太が食べたのかも知れない」

あまりの大きな声に草むらにねていた小人達は驚いて飛び起
きました。

「兄さん、おじいさんはどうしたの？」

「あれ、泣いているよ。きっと、おにぎりを食べたので泣いて
いるのかも知れないよ」

「みんなして逃げようよ」

「それがいい」

「それがいい」

「そんなことをしてはいけないよ。ぼくがいってあやまつてく
るよ」

「小人の兄さんのいちろうさんは、

「お爺さん、なぜ泣いているの」

「からすの勘太がお婆さんに持つていてやるおにぎりを」

「あー、やっぱりおにぎり——あれはね、ぼく達が食べてしま
つたの。ごめんしてね。そのかわりお爺さんによいものを貸し

てあげるから、ちよと、まうていてくださいね」

小人達が草むらのかげにかくれて、みえなくなつたと思った
ら、そのうちに大せいの小人達がぞろぞろと、やってきました。
みるとみんなは両方の手におもちゃの汽車を、

えんやらほいの、

えんやらほい、

えんやらほい。

と、掛け声かけてはこんでいます。

小人の兄さんは、

「ね、お爺さん、この汽車にのってください」

「なんだって、これにのれて？ はつはつはつ……いくらお
爺さんでも、こんな小さな汽車にはのれないよ」

「のれるのですよ」

「だって、そら、わしのからだはこんなに大きいし、この汽車
は、そら、わしのにぎりこぶしぐらいだもの」

「あのね、お爺さんまたぎさえすれば、よいですよ」

「またげばよい？ おかしいね、またげばよいかね」

お爺さんは小人のいうとおりにまたぎました。すると、どう
でしょう。お爺さんのからだはだんだん小さくなつて、いつの
まにか汽車の中にのつているではありませんか。

まー

がたこん、がたこん、

しゆつ、しゆつ、しゆつ、

「あー、電信柱が走つていく……あー、家が……あー、森も……」

がたこん、がたこん、
しゅつ、しゅつ、しゅつ、

「早いなあ、山の上に……あつ、雲の上に、雲の上に……」
雲の上では雷のお父さんが目をさまして、布団からはね起きたところです。

「もう、そろそろ雨をふらす雲が出てきたようだし、それに、夕方になりかけたことだから、人達を驚かしてやるかな。ごろ吉、太鼓を早く出せ。そして、そのばちをもって腹にぐつと力を入れて、たたけ、たたけ！」

「ころ、ころ、ころ、
夢中になつてたたいていた時、

がたこん、がたこん、

しゅつ、しゅつ、しゅつ、

と、いきおいよく走つていった小人の汽車に驚いた雷は、雲の上から大きな声をたてながら落ちてしましました。

お爺さんはおうちにおえると、お婆さんにおにぎりのお土産のかわりに、小人の汽車にのつていて雷を落してしまつたお話を、にこにこ顔で話してあげました。

お婆さんは、面白そうににこにこ顔できいていました。

この童話は、わたくしの長男が雷が嫌いであったので、なんとかしてその恐怖心を取り去つてやりたいと思つて矢先、

ある夕方のこと、強い雷雨に驚いてかやの中に駆け込み布団の

上に横になつた時、ひよっこり浮びあがつて出来たもの、思ひがけなくもその話をしてからは雷をこわがらなくなりました。

それは今から十六、七年前のことですが、その当時AK放送局に於ては童話の新人を求めており、わたくしもこの童話の研究をはじめて十五、六年程たつたこととて、自分の話術を批判してもらうには絶好の機会と思いこの企てに応じてみました。

会場は東京交詢社の建物内、試験委員は童話作家としての浜田広介先生、実演家としては安倍季雄先生、児童心理の方面から青木誠四郎博士の方々でした。全国から集まる童話の新人七十五名の中から三名選ばれ、その一人としてわたくしもその間に加えられ、特にこの作品は別扱いにされて「子供と家庭の夕」という豪華版に取り上げられて全国仲縁という光栄に浴したのでありました。

戦後児童文化の勃興により、この作品は浜田広介先生の童話集中にとり入れられて出版され、更に国民画劇の青木綠園氏によつて脚色されて、文部省並に更生省のすいせんとなつたもの、思えばなんとめぐまれたる「小人の汽車」よ。

さて、この童話が世の人達に認められ、また子供達から喜ばれるとするならば、どこにその素因があるのでしようか。最近の心理学では基本的欲求ということをいつております。基本的なものといつてもいろいろあります。最も基本的なものとして「たべる」「あばれる」「ねむる」ということの三つを数えたいと思います。

たべるということを、子供は強く望んでおります。雨の降る

中、ビニールの布呂敷をかぶって白衣観音のおわす小高い山へ旅行に来る生徒達と出会うことがあります。そうした中でさえ子供達のひとみの奥に喜びかがやきのあるのは恐らくおいしいたべものを持っているからだと思っています。

次に、あばれるということについて、わたくしはかつて路傍の石の映画をみたことを思い起しました。学校帰りの大勢の子供達が駆けていく。と、ふみきりのところで遮断機がおりる。その時、汽車の通りすぎていくまで駆足をつづけている場面を。子供達のいかに活動的であるかを表現した監督の卓抜さに驚きました。

寝る子は育つといいます。幼児にとってねむるということは活動的であればある程、それにもなって強く欲求されるものといえましょう。

そうだとすれば、「たべる」「あばれる」「ねむる」ということが童話の中の人物の行動として描写される時、作中の人物に同化して、この願望が満たされるところに自然と愉悦を感じるのでないでしょうか。童話の面白さの秘密はそこにかくされていると申しましょう。

小人の汽車の中には、にぎりめしが出ておりまし、お爺さんがねている場面がありますし、それにまた雷のあばれいでたり、汽車が疾走しておりますから、どうやら基本的の三つの要求がひそんでいます。

そこで、わたくしは日本五大童話を捉えて、調べてみました。桃太郎の中には、きびだんごがあります。もともと、桃太

郎の名前それ自身に食欲的な魅力があります。舌切雀にはのりが猿蟹合戦には柿とにぎりめしと栗といふように、それぞれ、食物が取材されています。あばれることも、鬼が島の活劇、雀おどり、猿蟹の合戦といふように動きのある場面がそれぞれに展開されているのです。だがねむるということになると五つのうち五つともみつかりません。この要求をわすれたよう取り上げていないのはどういうわけでしょう。おそらく、五大童話の作者達も太平の夢を充分に味っていたために、ねむるというこの大切なものを忘れたことかと思われます。

何を望むかということを基本的欲求の立場から小人の汽車を考え、更に五大童話にふれてみましたが、実は、他の立場からも、何を喜ぶかが、いくつも考えられるであります。

地上、地下、天上といふように場面の変化と小人と雷のコントラストの構成論や、巨小（小人）巨大（雷）の鼓張を喜ぶ心理論や、小（小人の汽車）が大（雷）を征服する即ち抑圧を排除することに快感を抱く精神分析論といったように、しかし、これらは、いいふるされているので止めるにいたします。

わたくしは、童話がしたいばかりに去年四月から幼稚園へ参りました。毎日、童話をしておりました。今年の七月からは、もう一つの幼稚園を兼務することになったので、尚、また、童話が出来るようになましりた。その間に、はつきりと、考えられたのが以上の基本的欲求ということでありました。

（高崎幼稚園長同第二幼稚園長）